

食品安全研究会

【食品微生物研究部会】

<p>1, 2 月</p>	<p>1. 分科会活動</p> <p>(1) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗なし <p>(2) MALDI-TOF MS 研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗なし <p>(3) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本缶詰びん詰レトルト食品協会（日缶協）より、低温発育性ボツリヌス菌の芽胞を供したリン酸バッファーおよびモデル食品での耐熱性試験の最終報告を受けた（2月18日）。 ・最終報告の内容について日缶協と参加企業6社で協議を実施した（3月2日、Web開催）。 <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3弾検証として、同一の芽胞液を使用した検証試験を各社にて完了した。 ・結果共有のための打合せを実施予定（3月29日、Web開催） <p>(4) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods" <p>2022年度 第1回部会全体会議を3月9日にZoomにて開催予定。</p>
<p>3, 4 月</p>	<p>1. 分科会活動</p> <p>(1) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗なし <p>(2) MALDI-TOF MS 研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗なし <p>(3) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・低温発育性ボツリヌス菌の芽胞を供したリン酸バッファーおよび各社モデル食品サンプルでの耐熱性試験の結果について、日本缶詰びん詰レトルト食品協会（日缶協）と参加企業6社で協議（3月2日、Web開催）。 ・耐熱性試験の結果公表および追試験について、日缶協と参加企業6社で協議（4月20日、Web開催）。 <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3弾試験（芽胞液を揃えた耐熱性試験）について、結果共有打合せを実施（3月29日、Web開催）。 ・一連の結果を考察するため、第4弾試験（複数企業で調製した芽胞液による耐熱性試験）案を作成中。 <p>(4) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods" <p>2. 2022 年度 第 1 回部会全体会議を 2022 年 3 月 9 日に Zoom にて開催した。</p>
5, 6 月	<p>2. 分科会活動</p> <p>(5) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗なし <p>(6) MALDI-TOF MS 研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗なし <p>(7) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・追加試験の実施（時期は未定）および結果公表のスケジュール（2023 年予定）について、メンバーおよび日本缶詰びん詰レトルト食品協会（日缶協）間で合意した。 <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 4 弾試験（複数企業で調製した芽胞液による耐熱性試験）案を作成した。メンバーによる打合せを実施（7 月 1 日 Web 開催）。 <p>(8) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods" <p>3. 部会全体の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2022 年度 第 2 回部会全体会合を、（独）製品評価技術基盤機構（NITE）様ご協賛のもと NITE 本所にて 6 月 20 日に開催した（参加者数 76 名。現地とオンラインのハイブリッド開催）。食品危害微生物に関連する業界共通の課題について、当研究部会と NITE 様の間にてディスカッションを行った。
7, 8 月	<p>1. 分科会活動</p> <p>(9) 芽胞菌研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進捗なし。 <p>(10) MALDI-TOF MS 研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（独）製品評価技術基盤機構（NITE）とのディスカッション会を実施（7/27）。 →MALDI-TOF MS（マトリックス支援レーザー脱離イオン化法）生データの提供に関する意見交換 →MALDI 活用に関する NITE 側からの最新情報の提供 <p>(11) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動なし（追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中）。 <p>b. 耐熱性試験法検証活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 4 弾試験（複数企業で調製した芽胞液による耐熱性試験）を実施中。 <p>(12) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods" <p>2. 部会全体の活動</p>

	<p>・10月4日(火)に2022年度第3回部会全体会合をオンラインにて開催予定。</p>
9, 10月	<p>3. 分科会活動</p> <p>(13) 芽胞菌研究分科会 ・進捗なし。</p> <p>(14) MALDI-TOF MS 研究分科会 ・進捗なし。</p> <p>(15) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動 ・活動なし(追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中)。</p> <p>b. 耐熱性試験法検証活動 ・第4弾試験(複数企業で調製した芽胞液による耐熱性試験)を実施中。</p> <p>(16) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会 ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods"</p> <p>4. 部会全体の活動 ・10月4日(火)に2022年度第3回部会全体会合および勉強会をオンラインにて開催(参加者:部会員40名)。 勉強会:細胞の蛍光染色による菌数測定メカニズムとその応用 講師:株式会社NPC 森脇俊一様</p>
11, 12月	<p>5. 分科会活動</p> <p>(17) 芽胞菌研究分科会 ・進捗なし。</p> <p>(18) MALDI-TOF MS 研究分科会 ・NITE-ILSI間でのMALDI-TOF MS生データ活用に関するディスカッション会を実施。(12月12日(月))</p> <p>(19) チルド勉強会</p> <p>a. ボツリヌス菌接種試験活動 ・活動なし(追加試験について日本缶詰びん詰レトルト食品協会にて調整中)。</p> <p>b. 耐熱性試験法検証活動 ・第4弾試験(複数企業で調製した芽胞液による耐熱性試験)のデータ取得が終了。データ取り纏め中。</p> <p>(20) 国際整合性のある食品微生物リスク管理研究分科会 ・以下の読み合わせおよび和訳を継続実施中。 FAO/WHO Microbiological Risk Assessment Series 24 "Statistical Aspects of Microbiological Criteria Related to Foods"</p> <p>6. 部会全体の活動 ・12月5日(月)に2022年度第4回部会全体会合および勉強会を開催(対面オンライン併用)(参加者:部会員41名)。 勉強会:食品製造現場における正しい洗浄操作のすすめ 講師:三重大学大学院生物資源学研究所 教授 福崎智司 先生</p>

ILSI Japan 活動報告<2022>

食品安全研究会

【食品リスク研究部会】

1, 2 月	<p>1. 2022 年第 1 回目の 部会を開催（1 月 27 日 14:00～15:10@Zoom） 参加者：10 社 13 名 新規 WG として勉強会 WG の開始。その他活動の進捗、新規メンバーの確認。今後の活動内容の検討。</p> <p>2. 勉強会（1 月 27 日 16：00～17:10@Zoom） 「欧州の新規食品規制 Novel Food と、最新動向（透明化規制）」 講師：インターテックジャパン株式会社 Food & Nutrition Group, Director の Erjin Eio 博士 参加者：80 名</p>
3, 4 月	【勉強会 WG】2022 年後半から 2023 年にかけて実施する勉強会シリーズの具体案について議論した（Web 会議）。
5, 6 月	【勉強会 WG】2022 年 7 月、9 月、11 月に安全性に関する勉強会実施にむけて、その具体案について議論した（Web 会議）。
7, 8 月	<ul style="list-style-type: none">・ 7/28 第 2 回部会を Web 開催。・ 7/28 第 1 回勉強会を ILSI Japan 会員企業を対象に Web 開催。『食品の安全性評価総論』 講師 帝京平成大学 健康医療スポーツ学部 中江 大 教授 参加者 31 名 第 2 回 9 月 21 日、第 3 回 11 月 10 日開催予定（いずれも部会参加企業が対象）。
9, 10 月	<ul style="list-style-type: none">・ 9/21 第 3 回部会を Web 開催（Zoom）。・ 9/21 第 2 回勉強会を食品リスク部会参加企業を対象に Web 開催（Zoom）。参加者 39 名 『食薬区分』 講師：国立医薬品食品衛生研究所 生薬部 伊藤 美千穂 部長 『健康食品の安全性』 講師：昭和女子大学 食健康科学部 食安全マネジメント学科 梅垣 敬三 教授 第 3 回を 11 月 10 日に Web 開催予定（部会参加企業が対象）。
11, 12 月	<ul style="list-style-type: none">・ 11/10 第 4 回部会を Web 開催（Zoom）。・ 11/10 第 3 回勉強会を食品リスク部会参加企業を対象に Web 開催（Zoom）。参加者 35 名。 『栄養系素材の安全性』 講師：京都大学 松井 徹 名誉教授 『食品添加物の安全性』 講師：一般社団法人 日本食品添加物協会 松村 雅彦 常務理事・ 2023 年 2 月 10 日にリスクコミュニケーションに関する勉強会を Zoom 開催予定（ILSI 会員および会員企業が対象）。

ILSI Japan 活動報告<2022>

食品安全研究会

【香料研究部会】

1, 2 月	特に進捗なし。
3, 4 月	特に進捗なし。
5, 6 月	特に進捗なし。
7, 8 月	特に進捗なし。
9, 10 月	特に進捗なし。
11, 12 月	特に進捗なし。

AAT プロジェクト

◆全体進捗

<p>1, 2 月</p>	<p>1) 研究ワーキンググループ (WG) テーマ推進による評価戦略の構築と実装および、 2) 情報収集・発信 (国際ワークショップ (WS) 内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催)、を両輪とする活動を、国立医薬品食品衛生研究所、AI-SHIPS、NITE 等の多数のアカデミアや学会およびアジアやヨーロッパの ILSI 支部と連携しながら進めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コアメンバー会議を開催 (1/31 @Web) <p>国際 WS をうけて発信する WS-Statement の最終化、及び公開シンポジウム開催等に関して議論し、今後の方針を決定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WS-Statement の最終化を検討中。WS レポートに記載し投稿予定。
<p>3, 4 月</p>	<p>1) 研究ワーキンググループ (WG) テーマ推進による評価戦略の構築と実装および、 2) 情報収集・発信 (国際ワークショップ (WS) 内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催)、を両輪とする活動を、国立医薬品食品衛生研究所、AI-SHIPS、NITE 等の多数のアカデミアや学会およびアジアやヨーロッパの ILSI 支部と連携しながら進めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体会議を開催 (3/15 @Web) <p>プロジェクト全体及び各 WG の進捗と今後の活動方針・計画を共有し、承認した。2021 年度の活動収支 (確定内容) 並びに 2022 年度の活動予算 (22 年度会費を含む) について報告。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムプログラム会議の設置 <p>シンポジウムの開催内容を議論し決定するためのプログラム会議の設置及びメンバー募集について全体会議 (3 月) にて説明し、4 月に会議メンバーを決定した。シンポジウムの開催方針、内容について議論を進める。</p>
<p>5, 6 月</p>	<p>【概要】 1) 研究ワーキンググループ (WG) テーマ推進による評価戦略構築と実装および、 2) 情報収集・発信 (国際ワークショップ (WS) 内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催)、を両輪とする活動を、国立医薬品食品衛生研究所、AI-SHIPS、NITE 等の多数のアカデミアや学会およびアジアやヨーロッパの ILSI 支部と連携しながら進めている。</p> <p>【進捗】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体会議を開催 (6/9 @Web) <p>プロジェクト全体及び各 WG の進捗と今後の活動方針・計画を共有し、承認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムプログラム会議の開催 (5/11, 5/31, 6/30) <p>シンポジウムの開催内容を決定するためのプログラム会議を開催した。シンポジウムの開催目的及び概要 (候補日程: 2023 年 1 月~2 月、開催形式: Web 開催) を決定し全体会議にて共有。プログラム (演題、演者) について議論を進めている。</p>
<p>7, 8 月</p>	<p>【概要】 1) 研究ワーキンググループ (WG) テーマ推進による評価戦略構築と実装および、 2) 情報収集・発信 (国際ワークショップ (WS) 内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催)、を両輪とする活動を、国立医薬品食品衛生研究所、AI-SHIPS、NITE 等の多数のアカデミアや学会およびアジアやヨーロッパの ILSI 支</p>

	<p>部と連携しながら進めている。</p> <p>【進捗】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開シンポジウムプログラム会議の開催（7/13, 7/25） <p>シンポジウム（候補日程：2023年1月～2月、Web開催）について検討。① プロジェクト活動の発信（国際的な研究・活動の動向について ILSI 国際 WS から入手した情報をもとに共有）及び② 代替技術に関する研究動向（有効性、安全性）の2テーマとして、プログラム案を決定した。テーマ②ではアカデミアの研究者からの講演を企画し、候補演者を選定した。引き続き、開催準備を国際 WS&シンポ WG と進める。</p>
9, 10 月	<p>【概要】 1) 研究ワーキンググループ（WG）テーマ推進による評価戦略構築と実装および、2) 情報収集・発信（国際ワークショップ（WS）内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催）、を両輪とする活動を、国立医薬品食品衛生研究所、AI-SHIPS、NITE 等の多数のアカデミアや学会およびアジアやヨーロッパの ILSI 支部と連携しながら進めている。</p> <p>【進捗】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体会議を開催（9/9 @Web） <p>プロジェクト全体及び各 WG の進捗と今後の活動方針・計画を共有し、承認した。公開シンポジウムについては開催概要案を共有し、日程（2023年2月3日（金）PM）及びWebによる開催を決定。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムプログラム会議の開催（9/6, 22, 10/7, 17, 24） <p>シンポジウムの開催内容について検討。① プロジェクト活動の発信（国際的な研究・活動の動向について ILSI 国際 WS から入手した情報をもとに共有）② 代替技術に関する研究動向（有効性、安全性）の2テーマとして、プログラム及び演題の案を確定。テーマ②ではアカデミアの研究者から3題の講演を企画し、演者を決定した。シンポジウム開催情報は ILSI Japan ホームページからの発信を予定。引き続き、準備を国際 WS & シンポ WG と進める。</p>
11, 12 月	<p>【概要】 1) 研究ワーキンググループ（WG）テーマ推進による評価戦略構築とケースレポートの作成 および、2) 情報収集・発信（国際ワークショップ（WS）内容のレポートによる発信、シンポジウムの開催）、を両輪とする活動を、国立医薬品食品衛生研究所、NITE、多数のアカデミアの専門家や学会、また、アジアやヨーロッパの ILSI 支部と連携しながら進めている。</p> <p>【進捗】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体会議を開催（12/6 @Web） <p>プロジェクト全体および各 WG の進捗と今後の活動方針・計画を共有し、全体にて承認。公開シンポジウム（2023年2月3日（金）PM、Web開催）について、開催内容、準備状況を報告。2022年度の活動収支（見込み）の報告並びに2023年度の活動費用と会費について説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムプログラム会議の開催（11/17, 12/21） <p>「まとめ」セッションの内容について検討。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ILSI Japan ホームページよりシンポジウム開催情報及び参加申し込みについての Web サイトを公開中。開催準備を引き続き国際 WS & シンポ WG の主導により進める。

◆2020 国際ワークショップ（WS）（ILSI Europe 協働）

1, 2 月	【概要】 食品領域における動物実験代替について、現状の把握と進むべき方向性を議
--------	--

	<p>論することを目的とした国際 WS を 2021 年 10 月に Web 開催した。</p> <p>【進捗】国際 WS において議論された WS-Statement の最終化へむけて、コアメンバー会議及び国衛研小島肇先生と議論して策定した WS-Statement (案) をモデレーターとパネリストへ送付した。今後、いただいた意見を反映させて最終化を進める。また、国際 WS の概要を「イルシー」誌フラッシュレポートに投稿した。より詳細な内容を WS レポートとして学術論文投稿すべく原稿を作成し、現在英文校正中である。WG 定例会議を 2/8 に開催した。進捗の共有に加えて、シンポジウムの開催時期や開催方式について情報を共有し、開催へ向けての検討をスタートした。</p>
3, 4 月	<p>【概要】2021 年 10 月に開催した国際 WS の論文化とシンポジウムの開催準備を進めている。</p> <p>【進捗】国際 WS のモデレーター、パネリスト及び、プロジェクトアドバイザーの帝京平成大学中江先生の承認を得て WS-Statement を確定した。WS-Statement と国際 WS の詳細な内容を記載した WS レポートを学術誌に投稿すべく、WG メンバーおよび ILSI 発表者により原稿を作成した。著者校正及び英文校正が完了した後に編集会議にて再度校正箇所を抽出し、2 回目の著者校正と英文校正が完了した。WG 定例会議を 3/8、4/12 に開催した。進捗の共有に加えて、シンポジウムの会議体や開催方式について情報を共有し、開催へ向けての準備を進めている。</p>
5, 6 月	<p>【概要】2021 年 10 月に開催した国際 WS の論文化とシンポジウムの開催準備を進めている。</p> <p>【進捗】国際 WS の論文化については、アドバイザーの先生の校閲が完了次第に最終の英文校正と著者校正を経て投稿予定。WG 定例会議を 5/13、6/3 に開催した。論文投稿の進捗とシンポジウムプログラム会議での議論内容を共有し、シンポジウム開催に向けて発生する作業を抽出し、一部の担当者が決定した。ILSI 関係者のみで開催した国際 WS とは異なり、公開のシンポジウムとなることから、開催案内の送付先が多岐にわたる等、WS とは異なる業務が発生することを WG メンバーと共有し、準備を進めている。</p>
7, 8 月	<p>【概要】2021 年 10 月に開催した国際 WS の論文化とシンポジウムの開催準備を進めている。</p> <p>【進捗】国際 WS の論文化については、アドバイザーの先生の校閲が完了しコメント及び修正点を反映中である。最終の英文校正を経て投稿予定。WG 定例会議を 7/6、8/4 に開催し、論文投稿の進捗とシンポジウムプログラム会議での議論内容を共有した。シンポジウム開催に向けては必要準備項目を抽出し、進める手順を決めると共に各項目の担当者を決定した。また、これまでに ILSI Japan が主催したシンポジウムで使用された各種資料を WG メンバーに共有した。参考にしながら準備を進める。</p>
9, 10 月	<p>【概要】2021 年 10 月に開催した国際 WS の論文化とシンポジウムの開催準備を進めている。</p> <p>【進捗】国際 WS の論文化については、アドバイザーの先生からのコメント及び指摘事項に対応し、英文校正を経て代替法の学術誌 ALTEX に Workshop Report として投稿し、10/20 に Accept された。WG 定例会議を 9/1、10/11 に開催し、論文投稿の進捗とシンポジウムプログラム会議での決定事項を共有した。さらにシンポジウム開催に向けて、講演依頼や協賛依頼、広報依頼、プレスリリース、フライヤーの草案の作成を進めている。シンポジウムの 2 か月前を目途に Web ページをオープンして参加の受付を開始する予定である。</p>
11, 12 月	<p>【概要】2021 年 10 月に開催した国際 WS の論文化とシンポジウムの開催準備を進め</p>

	<p>ている。</p> <p>【進捗】国際 WS の論文化については、代替法の学術誌 ALTEX に Workshop Report として投稿し、10/20 に Accept された。現在、掲載前の最終修正を依頼中である。WG 定例会議を 11/1、12/6 に開催し、論文投稿の進捗とシンポジウムプログラム会議での決定事項を共有した。さらにシンポジウム開催に向けて、演者や協賛・後援団体が確定し、シンポジウム Web サイトをオープンして参加受付を開始した。また、関連団体にシンポジウム案内の提供に関する広報を依頼しホームページやメルマガに順次掲載されている。講演要旨は全て提出され、1月上旬に Web サイトから閲覧できるよう準備を進めている。当日は関係者が集合して運営すべく、東京の会議室に運営本部を設置した。</p>
--	---

◆体内暴露予測ワーキンググループ

1, 2 月	<p>【概要】動物を用いないで機能性食品の摂取量を推定するためには動態の予測法開発が必須である。現在、主に、昭和薬科大学 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの適用性を検討。<i>in silico</i>に加え、腸管膜透過に関して <i>in vitro</i> 試験を組み込んだ評価フロー案を構築した。2022 年は、① 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの効果的活用と信頼性向上、② 予測性向上に向けた新規ツール活用、③ ケースレポート作成支援、を軸に活動する。</p> <p>【進捗】① 論文で公開された python による血中濃度予測モデル (ラット) の活用を検討。動態パラメータを代入することで、論文の血中濃度をほぼ再現できることを確認した。今後は動態パラメータの算出方法理解や食品成分での予測性把握、ヒト予測モデルの活用を検討。② 既存の腸管吸収モデル (Caco-2) で精度よく予測することが難しいと考えられる食品成分の特徴を、輸送体や代謝酵素の観点から整理した。3~4 月に具体的な食品成分リストを整理する予定。</p>
3, 4 月	<p>【概要】動物を用いないで機能性食品の摂取量を推定するためには動態の予測法開発が必須である。現在、主に、昭和薬科大学 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの適用性を検討。<i>in silico</i>に加え、腸管膜透過に関して <i>in vitro</i> 試験を組み込んだ評価フロー案を構築した。2022 年は、① 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの効果的活用と信頼性向上、② 予測性向上に向けた新規ツール活用、③ ケースレポート作成支援、を軸に活動する。</p> <p>【進捗】① 進捗なし。② 既存の腸管吸収モデル (Caco-2) で評価困難と考えられる食品成分を整理。iPS 腸管上皮細胞の市販メーカーと打合せし、iPS で評価可能な成分の絞り込みを検討。③ 評価対象物質である Riddelline に関して、<i>in silico</i> 動態予測と実測値の乖離原因を考察。腸管吸収を過大評価している可能性示唆。ケースレポートでの記載方法等今後議論。</p>
5, 6 月	<p>【概要】動物を用いないで機能性食品の摂取量を推定するためには動態の予測法開発が必須である。現在、主に、昭和薬科大学 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの適用性を検討。<i>in silico</i>に加え、腸管膜透過に関して <i>in vitro</i> 試験を組み込んだ評価フロー案を構築した。2022 年は、① 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの効果的活用と信頼性向上、② 予測性向上に向けた新規ツール活用、③ ケースレポート作成支援、を軸に活動する。</p> <p>【進捗】① 腸管吸収の <i>in silico</i> 予測が、食品成分の血中濃度予測に与える影響を検証。腸管吸収性が低いと想定される成分で血中濃度予測の精度が低下する傾向を確認した。② 新規ツール市販メーカーと打合せ実施。ツールの特徴や他モデルに対する優位</p>

	性などを確認した。③ 進捗無し。
7, 8 月	<p>【概要】動物を用いないで機能性食品の摂取量を推定するためには動態の予測法開発が必須である。現在、主に、昭和薬科大学 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの適用性を検討。<i>in silico</i>に加え、腸管膜透過に関して <i>in vitro</i> 試験を組み込んだ評価フロー案を構築した。2022 年は、① 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの効果的活用と信頼性向上、② 予測性向上に向けた新規ツール活用、③ ケースレポート作成支援、を軸に活動する。</p> <p>【進捗】① <i>in silico</i>での血中動態予測値が実測値と3倍の範囲内かを指標とした際に、予測結果が過大、あるいは過小に評価される食品成分それぞれに関して考察。過小評価成分は過大評価成分に比べ少なく、一部の成分を適用外とした場合本モデルの実運用上の過小評価リスクは小さいものと考えられた。② 新規ツール市販メーカーと打合せ実施。ツールの特徴や他モデルに対する優位性などを確認した。③ 進捗無し。</p>
9, 10 月	<p>【概要】動物を用いないで機能性食品の摂取量を推定するためには動態の予測法開発が必須である。現在、主に、昭和薬科大学 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの適用性を検討。<i>in silico</i>に加え、腸管膜透過に関して <i>in vitro</i> 試験を組み込んだ評価フロー案を構築した。2022 年は、① 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの効果的活用と信頼性向上、② 予測性向上に向けた新規ツール活用、③ ケースレポート作成支援、を軸に活動する。</p> <p>【進捗】① <i>in silico</i>での血中動態予測値が実測値と3倍の範囲内かを指標とした際に、予測結果が過大、あるいは過小に評価される食品成分それぞれに関して考察中。実測時の投与量が極端に少ない場合、予測値が過小評価されやすいなどの特徴が見いだされてきた。② 新規ツール市販メーカーと打合せ実施。食品成分への適用に向けた今後の取り組み方針を議論した。③ 進捗無し。</p>
11, 12 月	<p>【概要】動物を用いないで機能性食品の摂取量を推定するためには動態の予測法開発が必須である。現在、主に、昭和薬科大学 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの適用性を検討。<i>in silico</i>に加え、腸管膜透過に関して <i>in vitro</i> 試験を組み込んだ評価フロー案を構築した。2022 年は、① 山崎研究室の動態予測 (<i>in silico</i>) モデルの効果的活用と信頼性向上、② 予測性向上に向けた新規ツール活用、③ ケースレポート作成支援、を軸に活動する。</p> <p>【進捗】① <i>in silico</i>での血中動態予測値が実測値と3倍の範囲内かを指標とした際に、予測結果が過大、あるいは過小に評価される食品成分それぞれに関して考察中。腸肝循環など、<i>in silico</i>で未反映な要素が過小評価に影響する可能性が見いだされてきた。② 新規ツールの有用性検証に用いる物質群を選定中。数種の候補化合物が見いだされてきた。③ 進捗無し。</p>

◆データベースワーキンググループ

1, 2 月	<p>【概要】食品成分の既存毒性情報（文献等）を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。</p> <p>【進捗】2021年にデータベースに追加登録実施予定の150化合物について、65化合物の登録済。22年2月までにさらに40化合物を登録した。残る約45化合物について、追加登録の必要性を検討中。また、当該データベースの実用化に向け、使用目的として安全性評価を実施する対象成分の毒性情報検索、あるいは毒性ポテンシャル確認（初期スクリーニング）を仮設定した。このうち後者の目的に対し、当該データベースを有害性評価支援システム統合プラットフォーム（HESS）に搭載した際の毒性</p>
--------	---

	予測への寄与を検証する方法について検討を実施中。
3, 4 月	<p>【概要】食品成分の既存毒性情報（文献等）を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。</p> <p>【進捗】2022年2月までにデータベースに追加登録実施予定の150化合物について、105化合物を登録済。現在新たに21化合物の登録作業中。3月の全体会議にて現状の登録候補化合物の調査完了時点で新たな登録化合物の検索は完了することとしたため、最終的な登録数は126化合物となる見込み。また、当該データベースの実用化に向け、使用目的として①安全性評価を実施する対象成分の毒性情報検索及び、②毒性ポテンシャル確認（初期スクリーニング）を暫定的に設定した。このうち②の目的に対し、当該データベースをHESSに搭載した際の毒性予測への寄与を検証する方法について検討を継続実施中。</p>
5, 6 月	<p>【概要】食品成分の既存毒性情報（文献等）を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。</p> <p>【進捗】HESSフォーマットで追加登録実施予定のデータベース（150化合物）について、2022年6月までに126化合物を登録した。3月の全体会議にて決議した通り新たな登録化合物の検索は完了することとした。また、当該データベースの実用化に向け、使用目的として①安全性評価を実施する対象成分の毒性情報検索及び、②毒性ポテンシャル確認（初期スクリーニング）を暫定的に設定した。このうち②の目的に対し、当該データベースをHESSに搭載した際の毒性予測への寄与を検証する方法について検討した。毒性の標的臓器および毒性を示す用量が報告されている化合物を当該データベースより15～20個選定し、これらの毒性試験情報を搭載する前後のHESSを用いて毒性を予測し、その予測結果と既存試験情報との比較を行うこととした。現在、検証を行う対象となる化合物を当該データベースより選定中。</p>
7, 8 月	<p>【概要】食品成分の既存毒性情報（文献等）を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。</p> <p>【進捗】食品成分176種の毒性試験情報を有害性評価支援システム統合プラットフォーム（HESS）フォーマットにまとめた。HESSを用いて当該データベースの有用性検証を実施するため、検証方法の策定を実施中。HESSは構造類似性から毒性予測を実施するため、類似構造を有する化合物の有無、またその数を有用性検証の指標の一つとして設定する（①）。また予測精度の検証としてターゲット臓器及びNOEL値の妥当性確認を行う（②）。①の検証は2020年に実施した検証と同じ検証成分を用いて行うこととし、②の検証には毒性を有する食品成分15種を選定した。</p> <p>また、当該検証に向け、データベース構築の支援を頂いた食品安全委員会プロジェクトの山田先生（国立医薬品食品衛生研究所）、山崎先生（昭和薬科大学）にWGの進捗報告を行うとともに今後の化合物情報を使用したWGの研究活動の実施に関して了承を得た。</p>
9, 10 月	<p>【概要】食品成分の既存毒性情報（文献等）を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。</p> <p>【進捗】これまでの活動の成果として、食品成分176種の毒性試験情報を有害性評価支援システム統合プラットフォーム（HESS）フォーマットにまとめた。HESSを用いて当該データベースの有用性検証を実施するため、検証方法を策定した。2020年検証時と同様、（独）製品評価技術基盤機構（NITE）様にて検証化合物の予測を実施頂くため、NITE様を訪問し、当WGのこれまでの活動共有とともに、検証への協力依頼を実施した。現在、NITE様にて実施可能であるかの確認をいただいている。</p>

11, 12 月	<p>【概要】食品成分の既存毒性情報（文献等）を収集、活用し、反復投与毒性を予測する手法、システムを開発中。独自に毒性情報を収集することも検討する。</p> <p>【進捗】HESS を用いて当該データベースの有用性検証を 2020 年検証時と同様、(独)製品評価技術基盤機構 (NITE) 様にて検証化合物の予測を実施頂くこととなり、2023 年 1 月中を目途に作業を実施中。さらに Read across の予測結果と原著論文との比較実施に向け、比較方法の検討（予測精度の高さの指標検討、原著論文の確認方法等）を継続実施中。</p>
----------	--

◆ケースレポートワーキンググループ

1, 2 月	<p>【概要】NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略の具体化と実装の加速を目的に、体内暴露予測WGとデータベースWGの活動を起点に、<i>in vitro</i> assay系を加えたリスク評価戦略の具体事例を作成し、ケースレポートとして発信する。第1弾のケーススタディは「肝障害」をテーマにピロリジジナルカロイド (PA) を評価対象に選定。</p> <p>【進捗】</p> <p>ヒトへの予測の前段階として、NAMs を用いた評価戦略の妥当性確認のため、まずはラットに対する毒性予測性を検証中。ラット <i>in vivo</i> データを有する Riddelliine について文献調査を実施し、<i>in vitro</i> 細胞毒性試験データから、IC50=6.3μM を暫定的なラット肝毒性 PoD と仮設定。血中濃度については、AI-SHIPS (AI-based Substance Hazard Integrated Prediction System) プロジェクトとの連携のもとで、AI-SHIPS モデルにより予測値を算出した。モデルの開発段階のバージョンを用いており、予測値については文献値との比較、場合によっては山崎研究室との連携も視野にいれ、検討を進めている。</p>
3, 4 月	<p>【概要】NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略の具体化と実装の加速を目的とし、体内暴露予測WGとデータベースWGの活動を起点に、<i>in vitro</i> assay系を加えたリスク評価戦略の具体事例を作成し、ケースレポートとして発信する。第1弾のケーススタディは「肝障害」をテーマにピロリジジナルカロイド (PA) を評価対象に選定。</p> <p>【進捗】</p> <p>ヒトへの予測の前段階として、NAMs を用いた評価戦略の妥当性確認のため、ラットに対する毒性の予測性を検証中。そこで、ラットにて肝障害の報告がある Riddelliine について文献調査を実施し、<i>in vitro</i> 細胞毒性試験データから、IC50 値の 6.3μM を暫定的なラット肝毒性 PoD と設定した。また、AI-SHIPS モデルにて <i>in vivo</i> 血中濃度予測値を算出した。<i>In vitro</i> 試験データからの PoD 設定及びモデルによる血中濃度予測について現時点での課題を抽出し、体内暴露 WG とデータベース WG と協働して検討を進めている。</p>
5, 6 月	<p>【概要】NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略の具体化と実装の加速を目的とし、体内暴露予測WGとデータベースWGの活動を起点に、<i>in vitro</i> assay系を加えたリスク評価戦略の具体事例を作成し、ケースレポートとして発信する。第1弾のケーススタディは「肝障害」をテーマにピロリジジナルカロイド (PA) を評価対象に選定。</p> <p>【進捗】</p> <p>ヒトへの予測の前段階として、NAMs を用いた評価戦略の妥当性確認のため、ラットに対する毒性の予測性を検証中。そこで、ラットにて肝障害の報告がある Riddelliine</p>

	<p>について文献調査を実施し、<i>in vitro</i> 細胞毒性試験データから、IC50 値の 6.3 μM を暫定的なラット肝毒性 PoD と設定した。また、AI-SHIPS モデルにて <i>in vivo</i> 血中濃度予測値を算出した。現時点での課題として、AI-SHIPS での血中濃度予測値が高く算出されていること、エンドポイントとして細胞障害から細胞死に至る各過程のいずれが適切か、また、その指標として何が適切か、等が挙げられる。体内暴露 WG とデータベース WG と協働して検討を進める。</p>
7, 8 月	<p>【概要】 NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略の具体化と実装の加速を目的とし、体内暴露予測 WG とデータベース WG の活動を起点に、<i>in vitro</i> assay 系を加えたリスク評価戦略の具体事例を作成し、ケースレポートとして発信する。</p> <p>【進捗】 第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、NAMs を用いた評価戦略の妥当性を確認するため、ラット肝細胞を用いた評価スキームを策定中。文献報告からラット単回・反復投与試験にて肝細胞壊死の報告があるピロリジジナルカロイドのリデリンを評価対象物質とし、評価系構築に先立ってラット細胞系について検討した。代替法および評価戦略構築の観点から、ラット株化細胞を選択し、親化合物の潜在的な毒性が評価でき、さらに、代謝物の毒性を検出することができる実験条件であることを必須要件として検討中。既存（文献）情報を最大限利用するとの観点から、市販ラット肝由来株細胞 (BRL-3A) を用いて、リデリンの細胞毒性を評価し、初代培養細胞を用いた既存情報と比較することで、選択した細胞の妥当性の検証を進める。今後、適切な試験条件やエンドポイントの確認、慢性曝露を想定した評価方法について検討を続ける。</p>
9, 10 月	<p>【概要】 NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略の具体化と実装の加速を目的とし、体内暴露予測 WG とデータベース WG の活動を起点に、<i>in vitro</i> assay 系を加えたリスク評価戦略の具体事例を作成し、ケースレポートとして発信する。</p> <p>【進捗】 第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、NAMs を用いた評価戦略の妥当性を確認するため、ラット肝細胞を用いた試験により <i>in vitro</i> PoD を求め、活用する評価スキームを策定中。文献報告からラット単回・反復投与試験にて肝細胞壊死の報告があるピロリジジナルカロイドのリデリンを評価対象物質とし、評価系構築に先立ってラット細胞系について検討した。動物実験代替および評価戦略構築の観点から、市販のラット株化細胞 (BRL-3A) を用いた試験計画を立案し、親化合物の潜在的な毒性及び代謝物の毒性を検出することができるか否かの検証を予定。本試験結果と初代培養細胞を用いた既存文献における情報を比較することで、選択した細胞の妥当性の検証を進める。それと共に、適切な試験条件やエンドポイントの確認、慢性曝露を想定した評価方法について検討を続ける。</p>
11, 12 月	<p>【概要】 NAMs (New Approach Methodologies) を用いた食品成分の安全性評価戦略の具体化と実装の加速を目的とし、体内暴露予測 WG とデータベース WG の活動を起点に、<i>in vitro</i> assay 系を加えたリスク評価戦略の具体事例を作成し、ケースレポートとして発信する。</p> <p>【進捗】 第 1 弾のケーススタディは「肝障害」をテーマとし、NAMs を用いた評価戦略の妥当性を確認するため、ラット肝細胞を用いた試験から <i>in vitro</i> PoD を求め、活用する評価スキームを策定中。</p> <p>評価対象物質にはラット経口投与試験にて肝細胞壊死の報告があり、代謝物が毒性本体であることが確認されているピロリジジナルカロイドのリデリンを選択し、細</p>

<p>胞系には動物実験代替および評価戦略構築の観点から、ラット肝株化細胞 (BRL-3A) を選択した。選択した細胞系の妥当性を検証するため、BRL-3A 細胞が <i>in vitro</i> 評価において十分な代謝活性を有するか否かについて、通常のグルコース培養系とクラブツリー効果を回避したガラクトース培養系を設定し、ラット凍結肝細胞を用いた文献報告と比較する確認試験を実施中。得られた試験結果を基に、適切な試験条件やエンドポイントの確認、慢性曝露を想定した評価方法についての検討を計画している。</p>

ILSI Japan 活動報告<2022>

バイオテクノロジー研究会

1, 2 月	特に進捗なし。
3, 4 月	<p>■3月10日に第1回目会議を開催（リモート会議）</p> <p>(1) ERA プロジェクト調査報告書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第59号の勉強会：10報の論文をレビューし、意見交換を行った。 <p>(2) 報告事項</p> <p>① 臨時部会長会議の報告・研究助成金について</p> <ul style="list-style-type: none"> →今年度の研究助成金について辻本事務局長より説明。 <p>② 2022年4月の International Society for Biosafety Research (ISBR) シンポジウムに ILSI Japan として参画することについて</p> <ul style="list-style-type: none"> →COVID19により ISBR 開催が 2023年に延期。引き続き先生の派遣を調整中であることが報告された。 <p>③ 2021年度開催 WS の、「イルシー」誌への投稿状況について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際的なリスク評価方法から考える日本の生物多様性影響評価とデータトランスポートビリティ ・バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品添加物・食品等の安全性審査に関する WS 開催報告 →それぞれ、「イルシー」誌 149号、150号に投稿されることが共有された。 <p>④ International Organization for Standardization (ISO) 委員再任について</p> <ul style="list-style-type: none"> →橋本名誉会長が再任。様々な検査方法に関する議論の現状を報告いただいた。
5, 6 月	<p>■6月27日に第2回目会議を開催（味の素(株)本社会議室およびリモートのハイブリッド会議）</p> <p>(1) ERA プロジェクト調査報告書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第60号の勉強会：10報の論文をレビューし、意見交換を行った。 <p>(2) 報告事項</p> <p>① 2023年4月の International Society for Biosafety Research (ISBR) に ILSI Japan 参画 準備進捗</p> <ul style="list-style-type: none"> → COVID-19により ISBR 開催が 2023年に延期。2023年の4月30日～5月4日に Saint Louis で開催されることが報告された。総計6名の先生の参加を検討中：発表予定の2名の先生方（平塚先生、児玉先生）へは参加既に了承済。その他、2名の先生方（田中先生、徳永先生）についても、参加了承済み。 <p>② 2022年バイオテクノロジー応用微生物を利用して 発酵生産された食品添加物・食品等の安全性審査に関する WS 準備進捗</p> <ul style="list-style-type: none"> → 6月に講演予定の先生と面談。高度精製品申請にかかわる議論をする方向で一致。秋ごろにハイブリッド開催、参加費については検討中であることが報告された。 <p>③ 2021年度開催 WS の、「イルシー」誌への投稿状況について</p> <ul style="list-style-type: none"> → 「イルシー」150号に 2021年 WS の報告である「組換え微生物を用いた添加物・食品の安全性評価の科学的な考え方について」が掲載されたことが報告された。
7, 8 月	特に進捗なし。
9, 10 月	■9月16日に第3回目会議を開催（味の素(株)本社会議室およびリモートのハイブリッド

	<p>ド会議)</p> <p>(1) ERA プロジェクト調査報告書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 61 号の勉強会：10 報の論文をレビューし、意見交換を行った。 <p>(2) 報告事項</p> <p>① 2023 年 4 月の International Society for Biosafety Research (ISBR) に ILSI Japan 参画 準備進捗</p> <p>→2023 年の 4 月 30 日～5 月 4 日に Saint Louis で開催される当会に総計 6 名の先生を派遣予定。準備状況について紹介された。パラレルセッションでは千葉大学 児玉先生、横浜国立大学 平塚先生にそれぞれご発表いただくことで決定した。</p> <p>②2022 年バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品添加物・食品等の安全性審査に関する WS 準備進捗</p> <p>→2022 年 12 月 2 日に開催、明治大学 中島先生、千葉大学 児玉先生にご登壇いただくことが報告された。</p> <p>③その他</p> <p>→「イルシー」誌がパスワードで制限された電子書籍化されたことが報告された。</p>
11, 12 月	<p>■12 月 2 日に 2022 年バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品添加物・食品等の安全性審査に関する WS 開催。報告は「イルシー」154 号に掲載予定。</p> <p>日時： 2022 年 12 月 2 日 (金) 14:00-17:30</p> <p>場所：Zoom</p> <p>参加登録者：106 名、(当日参加者 94 名)</p> <p>プログラム</p> <p>14:00-14:10 ご挨拶と本 WS の意義について (ILSI Japan バイオテクノロジー研究会 加村 澄子)</p> <p>14:10-14:30 遺伝子組換え食品・添加物に係る制度について (厚生労働省医薬・生活衛生局食品基準審査課新開発食品保健対策室 豊田 美紀 専門官)</p> <p>14:30-14:50 遺伝子組換え食品等の食品健康影響評価について (内閣府食品安全委員会事務局評価第二課 松原 芳幸 課長補佐)</p> <p>15:00-15:40 遺伝子組換え微生物を利用して製造された添加物・食品とレギュラトリーサイエンス (千葉大学大学院 園芸学研究院 児玉 浩明 教授)</p> <p>15:40-16:10 高度精製食品・食品添加物 最近の審査の現状について (明治大学 農学部農芸化学科 中島 春紫 教授)</p> <p>16:20-17:20 総合討論 高度精製食品・食品添加物の現状 について情報提供 (ILSI Japan、一部外部有識者)</p> <p>17:20-17:30 ワークショップのまとめと閉会のあいさつ (ILSI Japan バイオテクノロジー研究会 加村 澄子)</p> <p>■12 月 7 日に第 4 回目会議を開催 (味の素(株)本社会議室およびリモートのハイブリッド会議)</p>

(1) ERA プロジェクト調査報告書

・第 62 号の勉強会：10 報の論文をレビューし、意見交換を行った。

(2) 報告事項

① 2023 年 4 月の International Society for Biosafety Research (ISBR) に ILSI Japan 参画 準備進捗

→2023 年の 4 月 30 日～5 月 4 日に Saint Louis で開催される当会に総計 6 名の先生を派遣予定。準備状況について紹介された。パラレルセッションでご発表いただく千葉大学 児玉先生、横浜国立大学 平塚先生と年明け会議を行うことが報告された。

② 2022 年バイオテクノロジー応用微生物を利用して発酵生産された食品添加物・食品等の安全性審査に関する WS 速報

→2022 年 12 月 2 日に開催。100 名以上の参加登録、Zoom ログイン数も 90 名以上であった。厚生労働省、食品安全委員会事務局、明治大学 中島先生、千葉大学 児玉先生にご登壇いただき、積極的な議論が行われた。

③その他

→11 月 14 日に開催された部会長会議の概要および当研究会は 10 万円の活動予算申請を行ったことが報告された。

→2023 年度も年 4 回の研究会の開催、ERA 報告書も年 4 回計 40 報とすることが確認された。

ILSI Japan 活動報告<2022>

栄養健康研究会

【栄養研究部会】

1, 2 月	<p>1. 2022 年度 第 1 回目の部会を Web (Zoom) で開催 (2 月 2 日、10:00~11:35) し、第 10 回 ILSI Japan ライフサイエンス・シンポジウム (3/3) 開催後の活動について打ち合わせた。</p> <p>① 「イルシー」誌へのシンポジウムフラッシュ・レポート原稿 (5 月中頃締切、8 月出版) : 各演題の担当者を確認・共有した。</p> <p>② シンポジウム開催後の栄養研究部会の活動の方向性</p> <p>➤ 今後のテーマ、スケジュール、セミナーの有料化・無料化等については、第 10 回 ILSI Japan ライフサイエンス・シンポジウムの収支やアンケート結果を把握してから検討することにした。</p> <p>2022 年度の第 2 回目の部会は、4 月に開催することにした。</p>
3, 4 月	<p>1. 第 10 回 ILSI Japan ライフサイエンス・シンポジウム「コロナ禍およびポストコロナにおける健康寿命延伸のための栄養と身体活動」を Zoom ウェビナーにて開催</p> <p>2. 日時 : 2022 年 3 月 3 日、9:30~16:55</p> <p>3. 参加登録数 : 315 名</p> <p>4. プログラム</p> <p>【基調講演】疾患横断的エビデンスに基づく健康寿命延伸のための提言 (第一次) (医薬基盤・健康・栄養研究所 理事、国立健康・栄養研究所 所長 津金 昌一郎先生)</p> <p>【シンポジウム 1】「テーマ : 免疫と栄養・運動」</p> <p>① 免疫システムを介した生体防御と必須栄養素の働き (医薬基盤・健康・栄養研究所ワクチン・アジュバント研究センター センター長 ワクチンマテリアルプロジェクト&腸内細菌システムプロジェクトプロジェクトリーダー 國澤 純先生)</p> <p>② 免疫機能を高める食品 (十文字学園女子大学 人間生活学部 食品開発学科 教授 辻 典子先生)</p> <p>③ 新型コロナウイルス感染症と栄養 (徳島大学大学院医歯薬学研究部(医学域) 教授 酒井 徹先生)</p> <p>④ 身体活動と免疫 (早稲田大学 スポーツ科学学術院 教授 鈴木 克彦先生)</p> <p>⑤ 総合討論 (モデレーター : 東京大学名誉教授、東京農業大学客員教授 清水 誠先生)</p> <p>【シンポジウム 2】「テーマ : コロナ禍およびポストコロナでの運動と栄養」</p> <p>① コロナ禍でフレイルをどう捉えるか (高崎健康福祉大学 保健医療学部 准教授 篠原智行先生)</p> <p>② コロナ禍における身体活動量低下とフレイル化 (筑波大学大学院 人間系 教授 山田 実先生)</p> <p>③ コロナ禍における食事と健康 (国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 部長 大塚 礼先生)</p> <p>④ コロナ禍における睡眠 (明治薬科大学 薬学部 准教授 駒田 陽子先生)</p>

	<p>⑤ アスリートにおける免疫機能低下とその対策 (獨協医科大学 基本医学基盤教育部 門 講師 枝 伸彦先生)</p> <p>総合討論 (モデレーター: 早稲田大学 教授、医薬基盤・健康・栄養研究所 国立健康・栄養研究所 身体活動研究部部長 宮地 元彦先生)</p>
5, 6 月	<p>1. 第 10 回 ILSI Japan ライフサイエンス・シンポジウムのフラッシュ・レポートの原稿を事務局に提出した。</p> <p>2. 2022 年度の栄養研究部会の部会を Zoom にて開催 (5 月 26 日 13:00~14:15) し、今後について意見交換した。方針は以下の通り。</p> <p>① 今後は、有料の公開セミナーを開催する方向で考える。なお、セミナー参加における ILSI Japan 会員のメリット (参加費等を含めたメリット) を考慮する。</p> <p>② テーマ設定については、昨年の会員向け勉強会と 3 月のライフサイエンス・シンポジウムで実施したアンケート調査結果を参考に、ILSI Japan の会員企業が増えることも考慮して検討を進める。</p> <p>複数の案の中から、先ずテーマを「世代別の栄養」(案)とし、セミナーのシリーズ化を検討することとした。</p>
7, 8 月	<p>栄養研究部会の部会に、アドバイザーの宮地先生と桑田先生にも参加していただき、今後のセミナーのテーマについて、意見交換した (7 月 25 日、13:00~14:15、Zoom)。</p> <p>セミナーの切り口について: 「健康寿命延伸」という目標に向け、あらゆる世代のヘルスリテラシーを向上させるために、世代別の健康・栄養の課題を取り上げ、科学的エビデンスを基にそれらの対策について議論するセミナーを企画・開催する。</p> <p>セミナーの題目(案)について: 「健康寿命延伸に向け、各世代で解決すべき課題と対策とは」、「将来のサルコペニア・フレイルの予防のため、解決すべき各世代での課題と対策とは」の 2 案とした。</p> <p>上記 1 の進捗状況を報告するため、「イルシー」誌 152 号に、「研究会トピックス 栄養研究部会 2021 年の活動の振り返りと今後の活動について」と題した原稿を投稿した (8 月 20 日)。</p>
9, 10 月	<p>1. 9 月の部会開催 (9 月 8 日、13:00~14:30、Zoom)</p> <p>「研究会トピックス 栄養研究部会 2021 年の活動の振り返りと今後の活動について」と題して「イルシー」誌 152 号に寄稿した原稿の内容を情報共有し、来年度 (2023 年) の活動方針について意見交換した。</p> <p>2. 10 月の部会開催 (10 月 6 日、15:00~16:35、Zoom)</p> <p>部会に、栄養研究部会のアドバイザーである宮地先生、桑田先生、清水先生、中江先生にもご参加いただき、栄養研究部会が主催する今後の有料セミナーのテーマについて、意見交換した。また、セミナー実施後の成果 (英文での発信、オンデマンド配信等) についても、意見交換した。</p>
11, 12 月	<p>3. 11 月の部会開催 (11 月 7 日、10:00~11:30、Zoom)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 来年 (2023 年) の活動方針について意見交換した。 • 第 1 回目の有料公開セミナーを「妊産婦や乳児栄養の分野」で開催することにした。 • セミナーの立案に向け、「妊産婦のための食生活指針」(2006 年) の改定 (2021 年) に携われた専門家の先生を訪問し、アドバイスをいただいた (11 月 17 日、森永乳業)。 <p>4. 12 月の部会開催 (12 月 8 日、15:00~16:20、Zoom)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 専門家の先生との面談内容 (11/17) を部会にフィードバックし、意見交換し、具

体的な方向性を共有した。

2023年 第1回 ILSI Japan アカデミックセミナー「世代別の健康と栄養」(仮)の案内状(案)の作成を開始した。

ILSI Japan 活動報告<2022>

栄養健康研究会

【GR プロジェクト】

1, 2 月	GR 法に関する論文を作成中。
3, 4 月	特に進捗なし。
5, 6 月	特に進捗なし。
7, 8 月	特に進捗なし。
9, 10 月	特に進捗なし。
11, 12 月	特に進捗なし。

ILSI Japan 活動報告<2022>

栄養健康研究会

【茶類研究部会・茶情報分科会】

1, 2 月	特に進捗なし。
3, 4 月	特に進捗なし。
5, 6 月	特に進捗なし。
7, 8 月	特に進捗なし。
9, 10 月	特に進捗なし。
11, 12 月	特に進捗なし。

CHP

◆CHP 全体

<p>1, 2 月</p>	<p>◇ SDGs 貢献プラットフォーム (参照) http://njppp.jp/project/ 海外活動におけるプラットフォーム形成 ●フィリピン：「フィリピン米の栄養強化プロジェクト 2021 (調査研究)」 栄養強化米の展開に関する予備調査を強化米販売企業(DSM株式会社)と共同でWFP (World Food Programme) フィリピンに依頼し推進中。 ●ベトナム：「ベトナムでの健康食品活用及び野菜・果実摂取に関する基礎調査」 野菜を用いた健康食品展開を推進している企業(カゴメ株式会社)と共同でNJPPP に新規プロジェクトとして承認された(2月3日)。食品産業センター、ベトナム国 立栄養研究所と推進中。 ◇SUN Business Network Japan (SBNJ) 事務局設立検討 SUN Business Network 共同議長のWFP、および農林水産省と意見交換。</p>
<p>3, 4 月</p>	<p>◇SDGs 貢献プラットフォーム ① 国内活動におけるプラットフォーム形成 ② 海外活動におけるプラットフォーム形成 ●フィリピン：「フィリピン米の栄養強化プロジェクト 2021 (調査研究)」 現地で調査を実施したフィリピンリサーチチームも交え、作業状況確認のためWeb 会議を実施。経費も含め、報告書を作成し提出(3月18日)。 ●ベトナム：「ベトナムでの健康食品活用及び野菜・果実摂取に関する基礎調査」 ① ベトナム国立栄養研究所(NIN) 担当者から報告書を受領し、Executive summary (日本語訳)を作成し、最終報告書をNJPPPに提出(3月24日)。 ② 昨年度の基礎調査を発展させる形で、NINと協力し、野菜ジュース等を用いた実 証試験を計画。NJPPPへの提案で合意 (4月20日)。 ◇SUN Business Network Japan (SBNJ) 事務局設立検討 SBN 共同議長のWFP (World Food Programme) 日本(運営内容)並びに農林水産 省(予算措置等)と意見交換。</p>
<p>5, 6 月</p>	<p>◇SDGs 貢献プラットフォーム ① 国内活動におけるプラットフォーム形成 ② 海外活動におけるプラットフォーム形成 ●フィリピン：「フィリピンでの栄養強化米プロジェクト 2021 (調査研究)」のフ ォロー 栄養強化米を普及する上で仮説検証も含めたプロジェクト立案を目指し、マルチ微量 栄養素強化米製造会社との打合せを設定。 ●ベトナム：「ベトナムでの健康食品活用及び野菜・果実摂取に関する基礎調査」の フォロー 野菜摂取啓発に向け、野菜ジュースを用いた実証試験を計画。プロジェクト概略につ いてベトナム国立栄養研究所(NIN)を通じた発信を計画。ILSI Japanとして、NIN</p>

	<p>とのルートを生かし、参画できる部分を検討中。</p> <p>●栄養啓発活動推進との協働プロジェクト ブロックチェーン技術を使った栄養啓発活動と、他の（栄養改善）プロジェクトとの併用について提案。以前、啓発活動プロジェクトを進めた企業に打診したところ、継続的な栄養改善活動を望んでいるとの返事あり。</p> <p>◇SUN Business Network Japan（SBNJ）事務局設立検討 SBN 共同議長の WFP（World Food Programme）日本と運営内容について、並びに農林水産省と予算措置等について検討し、さらにグローバルメンバーと意見交換を継続。</p>
7, 8 月	<p>◇SDGs 貢献プラットフォーム</p> <p>① 国内活動におけるプラットフォーム形成 ② 海外活動におけるプラットフォーム形成</p> <p>●フィリピン：「フィリピンでの栄養強化米プロジェクト 2021（調査研究）」のフォロー フィリピン市場における栄養強化米の認識向上及びニーズ把握に向けたプロポーザル策定を検討。フィリピン国立食品栄養研究所（FNRI）と協力して推進する。</p> <p>●ベトナム：「ベトナムでの健康食品活用及び野菜・果実摂取に関する基礎調査」のフォロー 野菜摂取啓発に向け、実証試験を計画。栄養教育推進プロジェクトを展開している企業との協働プロジェクトを模索。対象者の行動変容、栄養改善におけるシナジー効果を期待する。行動変容の成果指標設定において ILSI Japan が関与する。</p> <p>◇SUN Business Network Japan（SBNJ）事務局設立検討 SBN 連絡事務所設立に向け、予算措置対応（財務省）及び実際の役割、業務内容について、農林水産省、WFP（World Food Programme）と打ち合わせ。本年度中の設立披露を目標とする。</p>
9, 10 月	<p>◇SDGs 貢献プラットフォーム</p> <p>① 国内活動におけるプラットフォーム形成 ② 海外活動におけるプラットフォーム形成</p> <p>●フィリピン：「フィリピンでの栄養強化米プロジェクト 2022（調査研究）」 フィリピン国立食品栄養研究所（FNRI）に、① マルチ微量栄養素（MMN）強化米についての科学的エビデンスについての文献レビュー、② フィリピンの栄養問題に関する状況を考慮した MMN 強化米導入のメリット、意義に関する調査、を本年度の NJPPP へのプロポーザルとする方向で調整。</p> <p>●ベトナム：「ベトナムでの健康食品活用及び野菜・果実摂取に関する基礎調査」のフォロー 本年度 NJPPP へのプロジェクト提案（野菜摂取啓発）に向け議論。昨年度プロジェクトを進展させる形で、対象数を増やし、健康志向/野菜摂取等に関するアンケートの実施を計画。本年中に NJPPP に申請を検討。ILSI Japan 関与の形を見出す。</p> <p>●ミャンマー：「スマホを用いた栄養リテラシー向上プロジェクト」 本年度プロジェクト展開の可能性について関連企業と打ち合わせ。導入現地企業の候補、リモート操作でのプロジェクト展開について検討。</p> <p>◇SUN Business Network Japan（SBNJ）事務局設立検討 SBNJ という正式な支部設立が難しい状況下、SBN 戦略パートナーとして情報交換する機能を NJPPP に付与する形で SBN 本部と承認書を取り交わす方向で議論。ILSI</p>

	Japan への委託事業としての可能性を検討。
11, 12 月	<p>◇SDGs 貢献プラットフォーム</p> <p>① 国内活動におけるプラットフォーム形成</p> <p>② 海外活動におけるプラットフォーム形成</p> <p>●フィリピン：「フィリピンでの栄養強化米プロジェクト 2022（調査研究）」 フィリピン国立食品栄養研究所（FNRI）への委託プロジェクトとして本年度 NJPPP へ提案。作業部会（12/21）、運営委員会（12/28）で承認された。</p> <p>●ベトナム：「ベトナムにおける野菜の摂取行動に影響を与える要因調査」 本プロジェクトのターゲットが、対象者のパーソナリティと食事の多様性との関連であることを確認。その指標として、ベトナム版 Take10 を利用。NJPPP に提案書を提出し、作業部会（12/21）、運営委員会（12/28）で承認された。</p> <p>●ミャンマー：「完全オンラインによるブロックチェーン技術を応用した職場における栄養教育」</p> <p>① 本栄養リテラシー向上プロジェクトをミャンマーでの実施に向け、NJPPP 提案書を提出し、作業部会（12/21）、運営委員会（12/28）で承認された。</p> <p>② ミャンマーでのプロジェクト展開について、農林水産省と再度検討し、本年度は、外務省の判断もあり、そのまま進めるが、来年以降は再考が必要という結論に。</p> <p>◇SUN Business Network Japan（SBNJ）事務局設立検討</p> <p>●SBN は、SUN Movement の4つのネットワークの一つ（ビジネスセクター）として設立。SUN Movement 事務局と第22回国際栄養学会議時に面談。NJPPP の参加資格、NGO の参加メリット等について情報交換。</p>

◆Project PAN (Physical Activity and Nutrition) “身体活動と栄養” プロジェクト

1, 2 月	◇ テイクテン (TAKE10!®) ～元気で長生きのための運動・栄養プログラム～ ●Nutrients に論文掲載, タイトル ; Positive association between high protein food frequency and physical performance and higher level functional capacity. Kimura, M.; Moriyasu, A.; Makizako, H.; Nutrients 2022, 14(1), 72;, https://doi.org/10.3390/nu14010072 .
3, 4 月	◇ テイクテン (TAKE10!®) ～元気で長生きのための運動・栄養プログラム～ ・2021 年度すみだテイクテン教室報告書作成提出 (3 月 28 日)。 ・シルバー人材センター介護予防リーダー フォローアップ Web 講習会 会場：島根県津和野町 小川公民館 (4 月 7 日)。 ・18 期 (18 年目) すみだテイクテン教室開催 会場：フクシ・エンタープライズ墨田フィールド (墨田区総合運動場) (4 月 27 日)。
5, 6 月	◇テイクテン (TAKE10!®) ～元気で長生きのための運動・栄養プログラム～ ・18 期 (18 年目) すみだテイクテン教室開催 会場：フクシ・エンタープライズ墨田フィールド (墨田区総合運動場) (5 月 11, 25 日、6 月 1, 8, 15, 22, 29 日)。
7, 8 月	◇テイクテン (TAKE10!®) ～元気で長生きのための運動・栄養プログラム～ ・すみだテイクテン教室 (9 月から開催) の参加者募集を墨田区区報で開始 ・2022 年 1 月に “Nutrients” に掲載された論文の日本語訳 (一部改訂) が「イルシー」誌に掲載。“高たんぱく食品の高頻度摂取と高い身体機能、高次生活機能との関係性” ・東京家政学院大学、栄養プロデュース実習開始
9, 10 月	◇テイクテン (TAKE10!®) ～元気で長生きのための運動・栄養プログラム～ ●18 期 すみだテイクテン教室開催 会場：ユートリヤすみだ生涯学習センター (9 月 6, 20 日、10 月 4, 18 日)、墨田区総合体育館 (9 月 8, 22 日、10 月 6, 20, 27 日) ●東京家政学院大学 栄養プロデュース実習 (9 月 6, 8, 13, 22 日、10 月 4 日)
11, 12 月	◇テイクテン (TAKE10!®) ～元気で長生きのための運動・栄養プログラム～ ●18 期 すみだテイクテン教室開催 11 月 1 日、10 日、15 日、22 日、12 月 1 日、8 日、13 日 会場：ユートリヤすみだ生涯学習センター、墨田区総合体育館 ●益田市シルバー人材センター リーダー養成講座 11 月 8 日、9 日、30 日、12 月 1 日

◆Project DIET (Dietary Improvement and Education with TAKE 10!®)
 “途上国栄養改善と栄養教育” プロジェクト

1, 2 月	◇ 栄養改善事業推進プラットフォーム (NJPPP) 委託事業 (参照) http://njppp.jp/project/ インドネシア: 「インドネシアにおける野菜摂取促進に関する調査 2022」 インドネシアで水耕栽培を手掛けている企業 (株式会社大林組) と共同で NJPPP に新規プロジェクトとして承認された (2月3日)。食品産業センター、ボゴール農科大学 (IPB 大学) と契約。IPB へ調査依頼。
3, 4 月	◇ 栄養改善事業推進プラットフォーム (NJPPP) 委託事業 インドネシア: 「インドネシアにおける野菜摂取促進に関する調査 2022」 ① NJPPP の新規プロジェクトとしてボゴール農科大学 (IPB) の協力を得て基礎調査を実施。IPB から受領した報告書の Executive summary (日本語訳) を作成、最終報告書提出 (3月18日)。 ② 2022 年度プロジェクト提案について web 会議を実施。野菜摂取を推進したメニュー提案と栄養教育を含めたビジネスを念頭においたプロジェクト提案を計画 (4月15日)。
5, 6 月	◇ 栄養改善事業推進プラットフォーム (NJPPP) 委託事業 インドネシア: 「インドネシアにおける野菜摂取促進に関する調査 2022」 のフォロー 野菜、果物を① 食材通販サイトでの展開、②ミールキットサービスとしての展開、を念頭にビジネスモデルとしてプロジェクト提案を検討。栄養評価の部分で ILSI Japan の参画を目指す。
7, 8 月	◇ 栄養改善事業推進プラットフォーム (NJPPP) 委託事業 インドネシア: 「インドネシアにおける野菜摂取促進に関する調査 2022」 のフォロー 昨年度実施した野菜摂取に関する実態調査結果 (入手が難しい、重要性の認識不足) の解決を目指し、栄養教育を含む栄養バランスの取れた健康食材 (レシピ付き) 提供による栄養改善実証試験を計画。ILSI Japan は、成果指標設定も含め実践的なプロポーザル策定を担当。
9, 10 月	◇ 栄養改善事業推進プラットフォーム (NJPPP) 委託事業 ●インドネシア: 「インドネシアにおける健康的な食事の普及に関する調査 2022」 栄養教材付きミールキットを開発し、このミールキット購入による野菜摂取量増加プログラムの対象者解析および Consumer Acceptability 等を検証する Feasibility Study を行う。テイクテン (インドネシア版) を導入し本プロジェクトの成果確認の実施を計画。NJPPP へ申請し、作業部会 (10/27) での質疑応答を経て、運営委員会で承認予定。
11, 12 月	◇ 栄養改善事業推進プラットフォーム (NJPPP) 委託事業 インドネシア: 「インドネシアにおける健康的な食事の普及に関する調査 2022」 NJPPP へ申請し、作業部会 (10/27)、運営委員会 (11/16) で承認。現地調査 (12/13-16) を実施。栄養教育の第一ステージとして Take10 (インドネシア版) を導入するにあ

	たり、食事の多様性について、現地関係者（栄養士等）に説明し、理解を得た。
--	--------------------------------------

ILSI Japan 活動報告<2022>

国際協力委員会

1, 2 月	特に進捗なし。
3, 4 月	特に進捗なし。
5, 6 月	特に進捗なし。
7, 8 月	特に進捗なし。
9, 10 月	特に進捗なし。
11, 12 月	特に進捗なし。

食品機能性研究会

【AI 栄養・機能性研究部会】

<p>1, 2 月</p>	<p>I. AI 栄養機能プロジェクト</p> <p>○運営会議（1/28, 2/25 : Zoom）を開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分科会の活動方針として、フレイルの予防の社会実装を目的に、まず、身体的フレイルを予測する機械学習モデルの検討を開始することとした。今後、精神的フレイル、社会的フレイル、メタボへの拡大を視野に入れ、コホートデータ拡大の可能性についても検討を進める。 ・予備検討として BMI を目的変数に NEXIS のデータを用いた予測モデルの作成を行い、食品摂取、身体計測値等のデータにより BMI を予測するモデルを構築した。今後、予測精度を高めるための説明変数の選定と、縦断的なデータ解析による予測モデルについて検討し、行動変容を起こすための要素の抽出を行う。 ・NEXIS のデータ解析により、食品と腸内細菌叢の多様性について解析した結果、麺類、コーラとの間に負の相関、魚、果物との間に正の相関があることが示された。今後、相関の見られた食品に対し、食品摂取状況、栄養素の詳細解析、腸内細菌叢の属の解析を行い、腸内細菌叢の多様性向上の因子の抽出を行う。 ・NEXIS の解析体制づくりを目的に、国立健康・栄養研究所の協力研究員の申請を行った。 ・AI 設計者育成を目的に、社外の学習サイトを活用したプログラミングスキル向上の支援をする体制を整えた。 <p>II. AI ディアトロフィ研究部門</p> <p>○報告会（1/17 : 東北大+Zoom , 2/15 : Zoom）を開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビタミン C によるガン細胞死をモデルにした代謝物の測定が終了し、イジングモデルの係数算出とプログラムを作成中。今後、他の栄養素への展開と、新たに機能伝達経路として免疫をターゲットにイジングモデルの作成を行う。 ・プログラミングのスキル向上を目的に、Kaggle を用いた Python による機械学習モデルの作成演習を実施した。
<p>3, 4 月</p>	<p>3 月 7 日、AI 栄養・機能性研究部会 合同進捗報告会が開催され、AI 栄養機能プロジェクトからは、「NEXIS コホートデータを用いたバイオインフォマティクス解析」（健康・栄養研究所・朴先生）、「AI セミナー」（ISP・上島様）、活動目標と今後の計画（小林製薬・松嶋様）、AI ディアトロフィ研究部門からは、「イジングモデルのためのデータ取得ービタミン C 代謝を例にして」（東北大・宮澤大樹先生）、イジングモデルの作成にむけて」（同・畠山先生）、「食品免疫におけるイジングモデルのポテンシャル」（同・戸田先生）、「活動目標と今後の計画」（森永乳業・越智様）の発表がそれぞれあり、最後に、AI ディアトロフィ研究部門・宮澤先生（東北大）、AI 栄養機能プロジェクト・阿部先生（健康・栄養研究所）から講評をいただいた。</p> <p>I. AI 栄養機能プロジェクト</p> <p>○運営会議（3/25, 4/22 : Zoom, ハイブリッド）を開催</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・健康・栄養研究所（以下、健栄研）有識者のご助言の下、フレイルに関連するパラメータを抽出し、それらを基に NEXIS データからフレイルとの関連性が強いと思われる変数を作成した。 ・予定を前倒しで、健栄研内に NEXIS の解析環境を構築し、5 月から各社研究員が健栄研でデータ解析できる環境を整備した。それに伴い、各社から合計 10 名が協力研究員の申請を行い、無事、受理された。今後は、リモートでの解析環境構築の方法を検討する。 ・NEXIS データ解析を行うための使用言語やツールの選定を行った。 <p>II. AI ディアトロフィ研究部門</p> <p>○報告会（3/14, 4/19 : Zoom）を開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビタミン C 代謝に関するイジングモデルの作成についての進捗状況の共有、並びに 3/16 福島県沖地震による分析機器などの被害状況および影響に関する報告がなされた。 ・免疫代謝の研究に際し、使用する細胞、調査する食品成分に関し、企業からの意見に対して東北大・戸田教授より見解と今後の予定が示された。
5, 6 月	<p>I. AI 栄養機能プロジェクト</p> <p>○運営会議（5/27, 6/24 : Zoom, ハイブリッド）を開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康長寿 AI のβ版作成までのスケジュールを作成。6 月中旬までに各社で基本モデルを構築し、7 月中旬までにドラフト版を作成。8 月にハイパーパラメータ等のブラッシュアップを行い、8 月末をめどにβ版の作成完了を目指すこととした。 ・NEXIS データの解析環境の整備が終了したため、解析を開始した。まずは朴先生が実施した解析を協力研究員がトレースし、OJT での人材育成を兼ねた解析手法の習得を行った。その後、基本モデルの構築に着手し、幾つかの重要度の高いパラメータを抽出した。 ・リモート環境で NEXIS データにアクセスするための方法論に関して、健康栄養研究所との議論を開始した。 ・運営体制を一部更新し、フレイル予測モデル目標値設定チームとモニタリングチームを再編した。 ・和食チームで腸内細菌と食事、血中パラメーターについて、一定の知見が得られた。8 月末を目標に論文投稿を行う予定。 <p>II. AI ディアトロフィ研究部門</p> <p>○東北大と参画企業の共著総説論文が公開</p> <p>掲載誌 Nutrition Reviews</p> <p>論文タイトル Artificial intelligence in food science and nutrition: a narrative review</p> <p>○報告会（5/23, 6/20 : Zoom）を開催し、主に下記について説明、協議が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 1 期（～2024 年 3 月）ならびに 2022 年度のスケジュール案のアップデート ・現在行われているビタミン C の研究進捗および、次に計画されている免疫代謝の研究準備状況に関する報告（3/16 福島県沖地震による影響を含む）。 ・総説論文第 2 報の作成意向の共有。 ・AI リテラシー向上を目指した Python 実践編の開始。
7, 8 月	<p>I. AI 栄養機能プロジェクト</p> <p>○運営会議（7/22; Zoom, ハイブリッド）を開催。</p>

	<p>○8/26 の運営会議に関しては、演題が限定されたことからメール開催とした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NEXIS データの解析を開始し、6月に構築した基本モデルのブラッシュアップを行った。ただし、本結果に関しては、協力員限定でしか閲覧できないため、分科会メンバーへの共有は未実施。現在、国立健康・栄養研究所（健栄研）側で分科会メンバーに共有できる方法を模索中。 ・リモート環境で NEXIS データにアクセスする件に関しては、健栄研の大阪移転が延期になったことと、現在、健栄研側でリモートアクセスについて検討していることから、本分科会での活動は一旦中止とした。状況を継続的に確認していく。 ・フレイル予測モデル目標値設定チームの活動として、過去の研究報告（2018～2022年の13件の予測モデル）を調査し、今回の活動のベンチマークを設定した。 ・NEXIS データ以外の活用を目指して、國澤先生と面談を実施。 ・和食チームの検討結果に関しては、現在論文執筆中。 <p>II. AI ディアトロフィ研究部門</p> <p>○報告会（7/19 : Zoom）を開催し、主に下記について説明、講義が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在行われているビタミンCの研究進捗および、次に計画されている免疫代謝の研究準備状況に関する報告（3/16 福島県沖地震による影響を含む）。 ・AIリテラシー勉強会実施 <p>○基幹研究機関である東北大と各企業（希望）の個別・対面での研究ディスカッションを順次実施した。</p>
9, 10 月	<p>I. AI 栄養機能プロジェクト</p> <p>○運営会議（9/30, 10/28; Zoom）を開催。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NEXIS データの解析結果を分科会メンバーに共有するためには、分科会メンバーが倫理研修の受講後、国立健康・栄養研究所（健栄研）の IRB に通す必要があるとの話だったため、IRB に向けた倫理講習などの準備を進めてきた。しかし、健栄研の方針として IRB を通しても情報共有は難しいという判断に変わったため、今後の進め方を再検討する。 ・健栄研の大阪移転に対応するために、リモートで NEXIS データにアクセスできる環境の構築を検討中。健栄研の方で 2023 年 3 月を目標に環境構築を行う方向性が打ち出されたため、それに合わせる形で各社の環境構築を行う事で合意。 ・NEXIS 解析の結果に基づき、重要パラメーターを簡易に測定できるモニタリングデバイス調査を実施。 ・NEXIS 以外のデータ活用を目指して、國澤先生、山田先生、吉田先生（以上健栄研）、宮地先生（早稲田大）と面談を実施。腸内細菌のデータに関しては使用できる見込み。亀岡スタディのデータに関しては、京都先端大に使用を打診する。早稲田大のデータに関しては、活用する意義を示すことができれば使用可能とのこと。 ・和食チームの検討結果について、論文投稿準備完了。 ・今まで協力を頂いていた朴先生（健栄研）の退職に伴い、サポート体制が脆弱になる懸念あり。論文化などに影響が出る可能性があるため、早めの対処が必要。 <p>II. AI ディアトロフィ研究部門</p> <p>○報告会（9/20, 10/24 : Zoom）を開催し、下記について説明、講義が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究進捗：現在行われているビタミン C の研究進捗および、次に計画されている免疫代謝の研究準備状況に関する報告。 ・AI リテラシー勉強会：AlphaFold によるタンパク質構造予測、量子シミュレータなどに関する最新の状況、イジングモデルの復習

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな総説の執筆・作成に関する提案
11, 12 月	<p>I. AI 栄養機能プロジェクト</p> <p>○運営会議（11/25, 12/23 : Zoom）を開催。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ NEXIS データの解析結果を分科会メンバーに共有するための事前整理が完了し（後述）、分科会メンバーへの共有がなされた。 ・ 本プロジェクトの主要な目的であったフレイルを予測するモデルを一次的なバージョンではあるものの作成することができた。普遍性、実用性を確認、向上するための検討を継続している。 ・ NEXIS データの解析結果の共有について、NEXIS データの管理者、関係者の宮地先生、南里先生らと面談を行い（11/21）解析結果およびデータ共有の事前確認フローを整備することで共有できるようになった。 ・ 23 年度の取組方針について運営会議にて議論を始めた。学術的探究、社会実装、および教育訓練の 3 側面で成果が出せるよう、かつ参加者各位の合意が得られるものとして設定を試みている。 <p>II. AI ディアトロフィ研究部門</p> <p>○東北大と参画企業による報告会（11/21, 12/19 : Zoom）が開催され、下記について説明、講義が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 総説論文の作成： <ul style="list-style-type: none"> 総説論文第 2 弾（食品の品質・栄養・代謝における AI の活用に関する）の作成における役割分担とスケジュールの共有、内容等に関する質疑が行われた。 ・ AI リテラシー勉強会： <ul style="list-style-type: none"> Python を用いた機械学習プログラミングに関し、結果のビジュアライゼーション（グラフの可視化や描画）に関わる matplotlib と seaborn の使い方、機械学習ライブラリ「scikit-learn」の使い方について資料とデータをもとに講義が行われた。

ILSI Japan 活動報告<2022>

情報委員会

【情報委員会】

<p>1, 2 月</p>	<p>●栄養学レビュー 全体スケジュール [「ヨ」：予定]</p> <table border="1" data-bbox="363 533 1098 739"> <thead> <tr> <th></th> <th>編集会議</th> <th>翻訳締</th> <th>監修締</th> <th>発行</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通巻 115 号 30-2</td> <td>8/13</td> <td>10/20</td> <td>11/20</td> <td>2/20</td> </tr> <tr> <td>通巻 116 号 30-3</td> <td>11/11</td> <td>1/末</td> <td>2/末</td> <td>5/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 117 号 30-4</td> <td>2/7</td> <td>4/末ヨ</td> <td>5/末ヨ</td> <td>8/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 118 号 31-1</td> <td>5/初旬ヨ</td> <td>7/末ヨ</td> <td>8/末ヨ</td> <td>11/20 ヨ</td> </tr> </tbody> </table> <p>●通巻 115 号 30-2<2022 年冬> 対象誌：Nutrition Reviews 79(5)-79(7) 対象論文数：20 ⇒8/13 の編集会議にて 5 論文を採択 ⇒印刷原稿 OUP 承認取得 (1/28) ⇒2/20 発行済み</p> <p>●通巻 116 号 30-3<2022 年春> 対象誌：Nutrition Reviews 79(8)-79(10) 対象論文数：19 ⇒11/11 の編集会議にて 4 論文を採択 ⇒1 月末までに翻訳原稿回収 ⇒2 月末までに監修原稿回収 ⇒3/11 現在 初校確認中</p> <p>●通巻 117 号 30-4<2022 年夏> 対象誌：Nutrition Reviews 79(11)-80(1) 対象論文数：21 ⇒2/7 の編集会議にて 4 論文を採択 ⇒2/18 までに翻訳者確定 翻訳依頼 ⇒4 月末締切予定で翻訳依頼中</p>		編集会議	翻訳締	監修締	発行	通巻 115 号 30-2	8/13	10/20	11/20	2/20	通巻 116 号 30-3	11/11	1/末	2/末	5/20 ヨ	通巻 117 号 30-4	2/7	4/末ヨ	5/末ヨ	8/20 ヨ	通巻 118 号 31-1	5/初旬ヨ	7/末ヨ	8/末ヨ	11/20 ヨ
	編集会議	翻訳締	監修締	発行																						
通巻 115 号 30-2	8/13	10/20	11/20	2/20																						
通巻 116 号 30-3	11/11	1/末	2/末	5/20 ヨ																						
通巻 117 号 30-4	2/7	4/末ヨ	5/末ヨ	8/20 ヨ																						
通巻 118 号 31-1	5/初旬ヨ	7/末ヨ	8/末ヨ	11/20 ヨ																						
<p>3, 4 月</p>	<p>●栄養学レビュー 全体スケジュール [「ヨ」：予定]</p> <table border="1" data-bbox="363 1753 1098 1915"> <thead> <tr> <th></th> <th>編集会議</th> <th>翻訳締</th> <th>監修締</th> <th>発行</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通巻 116 号 30-3</td> <td>11/11</td> <td>1/末</td> <td>2/末</td> <td>5/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 117 号 30-4</td> <td>2/7</td> <td>4/末</td> <td>5/末ヨ</td> <td>8/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 118 号 31-1</td> <td>5/12 ヨ</td> <td>7/末ヨ</td> <td>8/末ヨ</td> <td>11/20 ヨ</td> </tr> </tbody> </table> <p>●通巻 116 号 30-3<2022 年春> 対象誌：Nutrition Reviews 79(8)-79(10)</p>		編集会議	翻訳締	監修締	発行	通巻 116 号 30-3	11/11	1/末	2/末	5/20 ヨ	通巻 117 号 30-4	2/7	4/末	5/末ヨ	8/20 ヨ	通巻 118 号 31-1	5/12 ヨ	7/末ヨ	8/末ヨ	11/20 ヨ					
	編集会議	翻訳締	監修締	発行																						
通巻 116 号 30-3	11/11	1/末	2/末	5/20 ヨ																						
通巻 117 号 30-4	2/7	4/末	5/末ヨ	8/20 ヨ																						
通巻 118 号 31-1	5/12 ヨ	7/末ヨ	8/末ヨ	11/20 ヨ																						

	<p>対象論文数：19 ⇒11/11の編集会議にて4論文を採択 ⇒1月末までに翻訳原稿回収 ⇒2月末までに監修原稿回収 ⇒3/11初校⇒3/25再校⇒3/27までに翻訳者FB ⇒4/5再校時打合せ⇒4/6OUPに印刷原稿の承認申請 ⇒4/7OUP承認⇒4/20色校正⇒印刷へ (⇒5/20発行予定)</p> <p>●通巻117号 30-4<2022年夏> 対象誌：Nutrition Reviews 79(11)-80(1) 対象論文数：21 ⇒2/7の編集会議にて4論文を採択 ⇒2/18までに翻訳者確定 翻訳依頼 ⇒4月末締切予定で翻訳依頼 ⇒4月末現在4論文中2論文翻訳原稿受領</p>																				
5, 6月	<p>●栄養学レビュー 全体スケジュール [「ヨ」：予定]</p> <table border="1" data-bbox="363 952 1133 1120"> <thead> <tr> <th></th> <th>編集会議</th> <th>翻訳締</th> <th>監修締</th> <th>発行</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通巻117号 30-4</td> <td>2/7</td> <td>4/末</td> <td>5/末ヨ</td> <td>8/20ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻118号 31-1</td> <td>5/12ヨ</td> <td>7/末ヨ</td> <td>8/末ヨ</td> <td>11/20ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻119号 31-2</td> <td>8/4ヨ</td> <td>11/20ヨ</td> <td>12/20ヨ</td> <td>2/20ヨ</td> </tr> </tbody> </table> <p>●通巻116号 30-3<2022年春> 対象誌：Nutrition Reviews 79(8)-79(10) 対象論文数：19 ⇒11/11の編集会議にて4論文を採択 ⇒3月中初校、再校、翻訳者フィードバックを経て ⇒4/5再校時打合せ⇒4/6Oxford University Press (OUP)に印刷原稿の承認申請 ⇒4/7OUP承認⇒4/20色校正⇒印刷⇒5/20発行(済)</p> <p>●通巻117号 30-4<2022年夏> 対象誌：Nutrition Reviews 79(11)-80(1) 対象論文数：21 ⇒2/7の編集会議にて4論文を採択 ⇒2/18までに翻訳者確定 翻訳依頼 ⇒6月中初校、再校、翻訳者フィードバックを経て ⇒7/5再校時打合せ⇒7/7OUPに印刷原稿の承認申請</p>		編集会議	翻訳締	監修締	発行	通巻117号 30-4	2/7	4/末	5/末ヨ	8/20ヨ	通巻118号 31-1	5/12ヨ	7/末ヨ	8/末ヨ	11/20ヨ	通巻119号 31-2	8/4ヨ	11/20ヨ	12/20ヨ	2/20ヨ
	編集会議	翻訳締	監修締	発行																	
通巻117号 30-4	2/7	4/末	5/末ヨ	8/20ヨ																	
通巻118号 31-1	5/12ヨ	7/末ヨ	8/末ヨ	11/20ヨ																	
通巻119号 31-2	8/4ヨ	11/20ヨ	12/20ヨ	2/20ヨ																	
7, 8月	<p>●栄養学レビュー 全体スケジュール [「ヨ」：予定]</p> <table border="1" data-bbox="363 1881 1133 2042"> <thead> <tr> <th></th> <th>編集会議</th> <th>翻訳締</th> <th>監修締</th> <th>発行</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通巻117号 30-4</td> <td>2/7</td> <td>4/末</td> <td>5/末</td> <td>8/20</td> </tr> <tr> <td>通巻118号 31-1</td> <td>5/12</td> <td>7/末</td> <td>8/末</td> <td>11/20ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻119号 31-2</td> <td>8/4</td> <td>11/20ヨ</td> <td>12/20ヨ</td> <td>2/20ヨ</td> </tr> </tbody> </table>		編集会議	翻訳締	監修締	発行	通巻117号 30-4	2/7	4/末	5/末	8/20	通巻118号 31-1	5/12	7/末	8/末	11/20ヨ	通巻119号 31-2	8/4	11/20ヨ	12/20ヨ	2/20ヨ
	編集会議	翻訳締	監修締	発行																	
通巻117号 30-4	2/7	4/末	5/末	8/20																	
通巻118号 31-1	5/12	7/末	8/末	11/20ヨ																	
通巻119号 31-2	8/4	11/20ヨ	12/20ヨ	2/20ヨ																	

	<p>●通巻 117 号 30-4<2022 年夏> 対象誌 : Nutrition Reviews 79(11)-80(1) 対象論文数 : 21 ⇒2/7 の編集会議にて 4 論文を採択 ⇒2/18 までに翻訳者確定 翻訳依頼 ⇒6 月中初校、再校、翻訳者フィードバックを経て ⇒7/5 再校時打合せ⇒7/15 OUP より印刷原稿の承認取得 ⇒7 月中に原則的に編集完了⇒印刷⇒8/20 発行 <OUP=Oxford University Press (当該誌の版元) ></p> <p>●通巻 118 号 30-4<2022 年秋> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(2)-80(4) 対象論文数 : 57 [80(2)=15 件、80(3)=20 件、80(4)=22 件] ⇒要旨を和訳⇒5/12 編集会議にて対象論文 4 件を選定 ⇒5/23 までに翻訳者確定、依頼完了 ⇒7 月末までに翻訳原稿受領⇒8 月末までに監修原稿受領</p> <p>●通巻 119 号 31-1<2023 年冬> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(5)-80(7) 対象論文数 : 50 [80(5)=22 件、80(6)=22 件、80(7)=6 件] ⇒8/4 編集会議にて対象論文 4 件を選定 ⇒8/8 までに翻訳者確定、依頼完了 (翻訳原稿締切 10/20 予定)</p> <p>今後の予定 ●通巻 118 号 10/5 再校時打合せ⇒11/20 発行予定 ●通巻 119 号 翻訳の締切は 10/20 を予定 ●通巻 120 号 11 月第 2~3 週に編集会議開催予定</p>																				
9, 10 月	<p>●栄養学レビュー 全体スケジュール [「ヨ」 : 予定]</p> <table border="1" data-bbox="363 1458 1133 1624"> <thead> <tr> <th></th> <th>編集会議</th> <th>翻訳締</th> <th>監修締</th> <th>発行</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通巻 118 号 31-1</td> <td>5/12</td> <td>7/末</td> <td>8/末</td> <td>11/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 119 号 31-2</td> <td>8/4</td> <td>10/20</td> <td>11/20 ヨ</td> <td>2/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 120 号 31-3</td> <td>11/10</td> <td>1/末ヨ</td> <td>2/末ヨ</td> <td>5/20 ヨ</td> </tr> </tbody> </table> <p>●通巻 118 号 31-1<2022 年秋号> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(2)-80(4) 対象論文数 : 57 [80(2)=15、80(3)=20、80(4)=22] ⇒翻訳者フィードバック⇒再校時打合せ (10/5) ⇒印刷入稿 (10/6) ⇒印刷原稿 OUP 承認 (10/7) ⇒色校正終了 (10/20) ⇒印刷</p> <p>●通巻 119 号 31-2<2023 年冬号> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(5)-80(7) 対象論文数 : 50 [80(5)=22、80(6)=22、80(7)=6]</p>		編集会議	翻訳締	監修締	発行	通巻 118 号 31-1	5/12	7/末	8/末	11/20 ヨ	通巻 119 号 31-2	8/4	10/20	11/20 ヨ	2/20 ヨ	通巻 120 号 31-3	11/10	1/末ヨ	2/末ヨ	5/20 ヨ
	編集会議	翻訳締	監修締	発行																	
通巻 118 号 31-1	5/12	7/末	8/末	11/20 ヨ																	
通巻 119 号 31-2	8/4	10/20	11/20 ヨ	2/20 ヨ																	
通巻 120 号 31-3	11/10	1/末ヨ	2/末ヨ	5/20 ヨ																	

	<p>⇒8/4 編集会議にて対象論文 4 件を選定 ⇒8/8 までに翻訳者確定、依頼完了 ⇒4 件共 10/20 までに翻訳原稿受領済み ⇒4 件とも確認の上、監修依頼済み (11/20 締切)</p> <p>●通巻 120 号 31-3<2023 年春号> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(8)-80(10) 対象論文数 : 18 [80(8)=7、80(9)=6、80(10)=5] ⇒要旨翻訳⇒編集会議開催案内 (10/27) ⇒編集会議 (11/10 開催予定)</p> <p>今後の予定 ●通巻 118 号 ⇒11/20 発行予定 ●通巻 119 号 ⇒11/20 監修締切⇒加筆・初校・再校… ●通巻 120 号 ⇒11/10 に編集会議を開催、収載論文を選定</p>																				
11, 12 月	<p>●栄養学レビュー 全体スケジュール [「ヨ」 : 予定]</p> <table border="1" data-bbox="363 913 1117 1075"> <thead> <tr> <th></th> <th>編集会議</th> <th>翻訳締</th> <th>監修締</th> <th>発行</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通巻 119 号 31-2</td> <td>8/4</td> <td>10/20</td> <td>11/20 ヨ</td> <td>2/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 120 号 31-3</td> <td>11/10</td> <td>1/末ヨ</td> <td>2/末ヨ</td> <td>5/20 ヨ</td> </tr> <tr> <td>通巻 121 号 31-4</td> <td>2/14</td> <td>4/末ヨ</td> <td>5/末ヨ</td> <td>8/20 ヨ</td> </tr> </tbody> </table> <p>●通巻 118 号 31-1<2022 年秋号> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(2)-80(4) 対象論文数 : 57 [80(2)=15、80(3)=20、80(4)=22] ⇒翻訳者フィードバック⇒再校時打合せ (10/5) ⇒印刷入稿 (10/6) ⇒印刷原稿 OUP 承認 (10/7) ⇒色校正終了 (10/20) ⇒印刷 ⇒11/20 発行</p> <p>●通巻 119 号 31-2<2023 年冬号> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(5)-80(7) 対象論文数 : 50 [80(5)=22、80(6)=22、80(7)=6] ⇒8/4 編集会議にて対象論文 4 件を選定 ⇒11/29 までに加筆原稿提出 ⇒1 論文は翻訳したものの、内容的に掲載不相当と判断され、掲載中止とする (12/5 決定) ⇒12 月中初校⇒初校戻し⇒再校⇒翻訳者フィードバック (1/4 を回答期限)</p> <p>●通巻 120 号 31-3<2023 年春号> 対象誌 : Nutrition Reviews 80(8)-80(10) 対象論文数 : 18 [80(8)=7、80(9)=6、80(10)=5] ⇒要旨翻訳⇒編集会議 (11/10) ⇒収載論文として 5 論文を選定 ⇒11/24 までに翻訳者確定・翻訳依頼済み (1 月末締切)</p>		編集会議	翻訳締	監修締	発行	通巻 119 号 31-2	8/4	10/20	11/20 ヨ	2/20 ヨ	通巻 120 号 31-3	11/10	1/末ヨ	2/末ヨ	5/20 ヨ	通巻 121 号 31-4	2/14	4/末ヨ	5/末ヨ	8/20 ヨ
	編集会議	翻訳締	監修締	発行																	
通巻 119 号 31-2	8/4	10/20	11/20 ヨ	2/20 ヨ																	
通巻 120 号 31-3	11/10	1/末ヨ	2/末ヨ	5/20 ヨ																	
通巻 121 号 31-4	2/14	4/末ヨ	5/末ヨ	8/20 ヨ																	

	<p>今後の予定</p> <p>●通巻 119 号 翻訳者フィードバック (1/4 を回答期限) ⇒1/5 再校時打合せ ⇒色校正、Oxford University Press に印刷原稿承認取得 ⇒2/20 発行</p> <p>●通巻 120 号 ⇒1 月末翻訳原稿締切⇒2 月末監修原稿締切</p> <p>●通巻 121 号 ⇒2/14 編集会議 (収載論文決定)</p>
--	--

*** 編集部会**

1, 2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・「イルシー」149 号 編集 ・「イルシー」150、151 号 掲載内容検討・執筆依頼
3, 4 月	<ul style="list-style-type: none"> ・「イルシー」150、151 号 編集 ・151 号より開始する、電子版での発行に向けてのご案内、準備を行う。
5, 6 月	<ul style="list-style-type: none"> ・「イルシー」150 号発行・送付 ・「イルシー」151 号 編集 ・151 号より開始する、電子版での発行に向けての準備
7, 8 月	<ul style="list-style-type: none"> ・「イルシー」151 号 (電子版初号) 発行、ホームページ掲載、発行のお知らせメール配信。 ・「イルシー」152 号 編集 ・「イルシー」電子化 <p>ILSI Japan ホームページより、「イルシー」誌を PDF にて閲覧できるようにした。 1 号～128 号： 下記「バックナンバーページ」から閲覧可能 (パスワードフリー) http://www.ilsijapan.org/ILSIJapan/BOOK/Ilsi/ILSIback.php 129 号～151 号 (過去 5 年間の発行号)： 「バックナンバーページ」もしくは各号の目次ページから閲覧可能 (各号ごとの パスワードが必要) ※ 閲覧ご希望の方は事務局までお問い合わせください</p>
9, 10 月	<ul style="list-style-type: none"> ・「イルシー」152 号、153 号編集
11, 12 月	<ul style="list-style-type: none"> ・「イルシー」152 号：発行、ホームページ掲載、お知らせメール配信 (11/18) ・「イルシー」153 号：編集中 (2023 年 2 月発行予定)

ILSI Japan 活動報告<2022>

事務局

【ILSI Japan 総会】

1, 2 月	令和 4 年通常総会が 2 月 21 日（月）午前 10 時より Web（Zoom）にて開催された。 1. 審議事項 第 1 号議案 2021 年度事業活動報告及び決算報告案が承認された。 第 2 号議案 2022 年度事業活動計画及び収支予算案が承認された。 適切な純資産額はいくらかの質問があり、1～2 年分の運営費相当が適切な額と回答した。 2. 報告事項 改選理事の紹介：13 名の重任理事、2 名の重任監事を紹介した。 本部動向の説明：2022 年本部収支予算、ワーキンググループ活動内容、本部総会日程とセッション項目等 3. 2023 年支部総会日程の案内
3, 4 月	
5, 6 月	書面評決を以て、下記に関して、議決を採った。 <決議事項> 事務所を下記の場所に移転し、定款第 2 条（事務所）を変更すること 場所： 東京都江東区森下三丁目 13 番 5 号ゴーベルビル 5 階 結果、満場一致で承認された。特定非営利活動促進法第 14 条の 9 の規定により、電子承認での採決がなされた。 承認日（令和 4 年 5 月 19 日）を以て、臨時総会の開催とした。
7, 8 月	
9, 10 月	
11, 12 月	

【事務局】

1, 2 月	なし
3, 4 月	3 月末に大塚和弘氏、出向を解かれ花王（株）へ帰任。
5, 6 月	特になし。
7, 8 月	7 月 4 日より新事務所（江東区森下 3-13-5 ゴーベルビル 5 階）にて稼働。住所変更の登記は完了。
9, 10 月	特になし。
11, 12 月	なし

【理事会】

1, 2 月	第 1 回理事会が令和 4 年 2 月 2 日（水）に開催された。 確認事項（令和 4 年通常総会決議事項・報告事項） 1. 2021 年事業活動報告及び決算報告案承認の件 事務局長が各研究会、研究部会ごとに事業活動の報告をし、決算の概要を資料に基づき説明した。
--------	--

	<p>2. 2022 年事業活動報告及び収支予算案承認の件 事務局長が各研究会、研究部会ごとに事業活動の計画及び収支予算の概要を資料に基づき説明した。</p> <p>3.改選理事の承認 事務局長が次期役員として、13名の重任理事、2名の重任監事の説明をした。 1、2、3とも異議なく承認された。</p> <p>報告事項</p> <p>1. 本部動向 事務局長から2022年本部収支予算等について説明した。</p> <p>2. 本部年次総会とシンポジウム開催内容 事務局長から年次総会の日程とシンポジウム開催内容について説明した。</p> <p>3. 2022年 ILSI Japan 理事会開催日程 スケジュールの確認をした。</p> <p>第2回理事会が2月25日（金）に開催された。 改選理事が出席し互選の結果、引続き児島理事が理事長に選任された。他に会長として宮澤理事、副理事長に桑田理事、坂田理事、谷口理事、阿部理事が選任された。</p>
3, 4 月	<p>第3回理事会が令和4年4月20日（水）に開催された。</p> <p><決議事項> 会計処理規程の一部改訂 固定資産計上の金額を1件10万円以上から20万円以上に変更する。 異議なく承認された。</p> <p><討議・報告事項></p> <p>1. ILSI Japan 広報活動 新規会員勧誘のため ILSI Japan の活動内容の広報戦略について事務局が提案し、討議した。</p> <p>2. ILSI 本部動向 本部より今後の ILSI 全体の方向性に関して提案があり討議した。</p> <p>3. 発表—第64回日本老年医学会学術集会 本年6月に桑田理事が、「将来の老化に与える小児期の発育・栄養の影響：主要な因子としての食生活の関与」と題し ILSI の活動を紹介しながら講演をする。</p> <p>4. 後援—食品開発展 2022 本年10月12～14日に東京ビッグサイトにて開催される。このイベントには1990年の第1回開催より ILSI Japan が後援をしている。</p> <p>5. 事務所移転 コスト削減を目指し、20物件を検討した結果、面積、家賃、場所、初期費用の比較をし4候補に絞った。</p>
5, 6 月	<p>書面評決を以て、下記に関して、議決を採った。</p> <p><決議事項> 事務所を下記の場所に移転し、定款第2条（事務所）を変更すること 場所：東京都江東区森下三丁目13番5号ゴーベルビル5階 結果、満場一致で承認された。 承認日（令和4年5月19日）を以て、臨時理事会の開催とした。 本議決を以て総会の議決に臨むこととした。</p>

7, 8月	<p>第4回理事会が令和4年7月6日（水）に開催された。</p> <p><討議・報告事項></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 事務所移転 事務局長より移転選定の理由、新事務所の災害対応、経費面で旧事務所の原状回復工事費や書籍の廃棄損が予算より発生することを説明した。 2. ILSI Japan の広報活動 会員獲得のための広報活動のツール作成や方向性に関して討議した。勧誘のため事務局だけでなく、理事、会員社、研究部会会員から、同業者や原料・包材の取引先等への積極的なお声掛けを依頼した。 3. ILSI 本部動向、その他 事務局長より本年6月末開催の本部総会の内容や講演議題、及び Global Assembly の重要な議題を説明した。
9, 10月	<p>第5回理事会が令和4年10月13日（木）に開催された。</p> <p><討議・報告事項></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ILSI Japan2022 年収支見込み及び2023 年収支予算に関して 事務局長より2022 年収支見込と2023 年収支予算の、研究部会の収支を除く基本収支について見込と予算を説明した。 2. 日本動物実験代替法学会 第35 回大会参加 事務局長より AAT プロジェクトとしてパネル・ディスカッション参加と発表を行うことを説明した。 3. 公開シンポジウム開催（AATプロジェクト） 事務局長より来年2月に開催する、シンポジウムのプログラムについて説明した。 4. ILSI グローバル・リサーチ・プログラム 事務局長より、本部主催の「グローバル・リサーチ・プログラム」の具体的な課題とテーマ募集の状況について説明した。 5. 定款変更他 事務所引越しに伴う定款第2条の変更申請を都庁に提出、8月下旬に受理と説明した。 来年開催の支部総会は Web と会場に集うハイブリッド形式を予定していると説明した。
11, 12月	<p>第6回理事会が令和4年12月14日（水）に開催された。</p> <p><決議事項></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. CHP資産廃棄 販売数低下によるテイクテンDVDの廃棄に関する提案が承認された。 2. 2023 年収支予算案 事務局が2022 年収支見込及び2023 年収支予算案を説明し承認された。財政状況改善のための会員勧誘の2022 年行動計画の振返りを説明し、意見をもらった。 3. IUFOst-Japan 退会 ILSI Japan の厳しい財政状況を理由による退会に関する提案を承認された。 <p><報告、討議事項></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ILSI 本部2022 年収支見込と2023 年収支予算 事務局が本部の資料を解説した。 2. ILSI Global Research Program 事務局が各支部から提案された内容について説明した。 3. 2023 年度理事会・総会日程 事務局が説明した。 4. 訃報 初代事務局長の桐村二郎氏が7月に逝去されたと報告した。